

〔学術論文〕

「コミュニケーション英語」における習熟度別クラス編成の試み The Effects of Streaming: the Case of an “English Communication” Course

宮 田 学、マーク・リバック、ジャクリーヌ・ノリス
Manabu Miyata, Mark Rebuck, Jacqueline Norris

要旨 名古屋市立大学では、外国人教師が担当する「コミュニケーション英語」の授業を習熟度別クラス編成で実施する方針が決まった。1年目にあたる2007年度は、1つのクラスにおいて試験的に導入して、その成果を測ることにした。

4月当初に経済学部1年生の2クラスにおいて英語力判定テスト(CASEC)を実施し、その得点に従って実験クラスの学生たちを上位群と下位群に分けた。比較の対象となる通常クラスでは、学生たちを番号順に2つのクラスに分けた。2人の外国人教師がそれぞれのクラスを担当し、同じ内容の授業を1年間継続した。1月の授業にて英語力判定テストを再度実施し、得点の変化を測るとともに、習熟度別クラス編成による授業に関する意識調査を行った。また、得点の増減が著しい学生を対象に個別インタビューを行った。

英語力判定テストの結果、実験クラスで平均点が4月の577.4点から1月の575.9点へとわずかに下がったのに対して、通常クラスでは、平均点が559.6点から585.4点に上昇した。本論文では、今回の試験的導入の経過と結果をまとめながら、なぜそのような結果となったのかを分析するとともに、英語教育の効果を上げるための方策について考察する。

キー・ワード：英語力判定テスト、意識調査、個別インタビュー、授業内容、学習態度

1 習熟度別クラスの試験的導入

名古屋市立大学は、2006年4月に「公立大学法人」となった。その中期計画に「基本的なコミュニケーション能力の向上を図るとともに、外国語・情報処理教育にあっては多様なニーズに応えた習熟度別クラス編成を導入することにより、教育効果を高める」という項目があり、2007年度より教養英語で習熟度別クラス編成を実施することが決定された。

そこで、外国語科目部会に置かれている英語部会にて、実施に向けての取り組み方について論議し、以下のような方針を確認した(2006年11月)。

- ・外国人教師による「コミュニケーション英語」の授業において習熟度別指導を行う。
- ・まず、入学定員が多く、英語力の差が比較的大きいと考えられる経済学部にて試験的に導入し、

習熟度別クラス（＝実験クラス）と通常クラスを設定して比較する。

- ・ 2007年度は、経済学部1クラスの1年E組を実験クラスとし、通常クラス（1年H組）と比較する。
- ・ 習熟度別クラス編成の効果を測るために、前期の4月（事前）と後期の1月（事後）にて、英語力判定テスト（CASEC）を実施する。
- ・ 1月の事後テストを実施する際に「意識調査」を行う。
- ・ 事前テストと事後テストの比較から、顕著な変化が見られた学生（＝抽出生）を対象に「個別インタビュー」を実施する。

2 習熟度別クラス編成

「コミュニケーション英語」の最初の授業（2007年4月17日）にて、CASECによる英語力判定テスト、その後の2回の授業を利用して英語のインタビューを実施した。英語力判定テストをCASECに決めた理由は、以下のような特色による。

- ・ CASECは、Computerized Assessment System for English Communicationの略。旺文社、英検協会などが共同開発した「英語コミュニケーション能力判定テスト」で、信頼がおける。
- ・ テスト内容は、語彙、表現、リスニング、書き取りの4セクションで構成されている。
- ・ インターネットを利用し、受験後すぐ（30分ほどのちに）受験者全員の結果がわかる。
- ・ TOEIC、TOEFL、英検などの「スコア目安」を示してくれる。
- ・ 受験に必要な時間が40分程度で済む（受験者により30分～60分）ため、授業時間内での実施が可能となる。TOEIC IPの場合は、最低2時間半が必要。
- ・ 受験者のレベルに対応した出題がなされるが、項目応答理論（IRT）により、標準的な測定値が示される。

実験クラスのクラス分けには、CASECの結果のみを用いることにした。当初は英語によるインタビューの結果も考慮する予定であったが、双方の資料にはかなりの食い違いが見られた。インタビューを担当した外国人教師のA先生とB先生が、インタビューがどうしても主観的な判断で採点するため、CASECに比べると客観性に欠ける、としたためである。

この結果、CASECの得点に従って、実験クラスの学生を上位群24名（E1）、下位群23名（E2）に分け、E1をA先生、E2をB先生が担当することにした。また、実験の対象となる通常クラスは、学籍番号順に名簿の前半24名（H1）をB先生、後半23名（H2）をA先生が担当することとした。

3 授業の内容

5月連休明けの2007年5月8日より授業を開始した。習熟度別クラス編成による効果を測るには、実験クラスと通常クラスの違いを「実験クラスが上位群／下位群に分けられていること」だけにすべきと考え、2つのクラスの授業内容を原則として同一のものとすることを申し合わせた。したがって、習熟度別編成によるクラスであることを必要以上に意識しない、習熟度別編成の効果を上げようと作為的な授業を進めないことも確認した。ただし、実験クラスでは、学習の量と質が通常クラスと異なることが予想されるので、授業進度に違いが生ずることはやむを得ないものと考えた。その結果、E1クラスでは通常クラスで扱わない教材や活動を取り入れたり、逆に、E2クラスでは一部の教材や活動を省たりすることを想定した。

実際には、A先生・B先生いずれも、前期・後期を通じて、実験クラスと通常クラスではほぼ同じ内容の授業になったという報告を受けている。前期の授業がどのような内容で進められたかを[資料1]で見えていただきたい。

4 試験的導入の結果

(1) CASEC の結果

4月の事前テスト、1月の事後テストの結果を単純に比較したものが[表1]である。実験クラスで平均点が577.4点から575.9点とわずかに下がったのに対して、通常クラスでは、平均点が559.6点から585.4点に上昇し、1月の時点では通常クラスのほうが高い得点となった。先生別に見ると、習熟度の上位群であるE1では、平均点が613.5点から604.2点へと下がったものの、下位群のE2では、541.3点から544.8点へと若干上がっている。通常クラスでは、いずれのグループでも平均点は上昇している。

個人別に得点の変化を調べてみると、[表2]のように、実験クラスで得点が上がった者17名、下がった者23名、変化のなかった者1名であり、通常クラスでは、上がった者24名、下がった者13名、変化のなかった者0名であった。

[表1] CASECの結果－1：クラス全体

実験クラス (E)			通常クラス (H)		
	2007年4月実施	2008年1月実施		2007年4月実施	2008年1月実施
最高スコア	699	708	最高スコア	737	728
最低スコア	471	487	最低スコア	361	469
全体平均	577.4	575.9	全体平均	559.6	585.4
E1クラス平均	613.5	604.2	H2クラス平均	563.2	585.1
E2クラス平均	541.3	544.8	H1クラス平均	556.4	585.7
受験者数	46	42	受験者数	45	39

〔表2〕 CASEC の結果－2：個人別得点変化

実験クラス (E)

整理番号	4月	1月	得点差	先生
1	633	708	75	A
2	534	609	75	B
3	471	544	73	B
4	626	683	57	A
5	555	611	56	B
6	506	556	50	B
7	504	549	45	B
8	502	533	31	B
9	643	666	23	A
10	567	587	20	B
11	561	580	19	B
12	587	602	15	A
13	603	618	15	A
14	503	517	14	B
15	552	562	10	B
16	515	522	7	B
17	533	534	1	B
18	587	587	0	A
19	590	588	- 2	A
20	662	659	- 3	A
21	555	551	- 4	B
22	579	574	- 5	A
23	618	612	- 6	A
24	586	577	- 9	A
25	595	584	- 11	A
26	538	525	- 13	B
27	575	558	- 17	B
28	699	679	- 20	A
29	601	579	- 22	A
30	583	560	- 23	A
31	597	570	- 27	A
32	569	533	- 36	B
33	538	500	- 38	B
34	558	520	- 38	B
35	611	571	- 40	A
36	611	570	- 41	A
37	617	569	- 48	A
38	575	518	- 57	B
39	670	601	- 69	A
40	565	487	- 78	B
41	593	495	- 98	A
42		641		A
43	631			A
44	588			A
45	568			B
46	557			B
47	549			B

通常クラス (H)

整理番号	4月	1月	得点差	先生
1	361	495	134	A
2	585	693	108	B
3	571	658	87	A
4	561	647	86	B
5	388	471	83	B
6	647	728	81	A
7	496	562	66	A
8	435	495	60	A
9	418	469	51	B
10	631	678	47	B
11	616	662	46	B
12	461	504	43	A
13	491	526	35	B
14	576	606	30	A
15	581	610	29	B
16	597	621	24	A
17	647	670	23	A
18	613	635	22	B
19	592	611	19	B
20	563	580	17	B
21	568	584	16	B
22	639	649	10	A
23	548	557	9	B
24	601	610	9	B
25	519	518	- 1	A
26	640	639	- 1	A
27	542	538	- 4	B
28	556	552	- 4	A
29	577	565	- 12	A
30	672	658	- 14	B
31	551	534	- 17	A
32	561	543	- 18	B
33	598	579	- 19	A
34	543	518	- 25	B
35	576	538	- 38	B
36	626	550	- 76	A
37	737	658	- 79	A
38	663			B
39	626			A
40	551			B
41	540			B
42	511			B
43	500			A
44	467			A
45	438			B
46		576		A
47		542		A

(2) 意識調査のアンケート

1月の事後テストに先立って、[資料2]のような授業アンケートに答えてもらった。その結果をまとめたものが、[資料3]である。これを見ると、実験クラスと通常クラスの回答は、かなり似通ったものとなっている。差が観察されるのは、英語の好き嫌いを尋ねた[A]-(3)、英会話力の変化について尋ねた[A]-(5)、習熟度別クラス編成について尋ねた[C]-(1)、(2)、(4)である。

[A]-(3)では、習熟度別編成の上位クラス(E1)で「大好き」あるいは「好きなほう」と答えた学生が18名(回答者の78.3%)いる一方で、「嫌いなほう」「大嫌い」と回答した者は一人もいない。CASECの得点が上位の学生がこのクラスを構成していることから、当然の結果と言える。ところが、この同じ学生たちは、[A]-(5)では8名(34.8%)が「(英語を話す力は)変わらない」、10名(43.5%)が「少しダウンした」「かなりダウンした」と回答している。[表2]を見てみると、このグループの学生でCASECの得点が上がった者がわずか5名、逆に下がった者が15名であり、英語が比較的良くできる学生たちは、自己の英語力の変化をよく自覚していると言えよう。

習熟度別クラス編成について尋ねた[C]の項目では、習熟度別クラスによる授業を体験したか否かによる差が見られる。つまり、[C]-(1)では、通常クラスで「学生の希望で」クラス編成を行うのがよいと回答した者の割合が高い。また、[C]-(2)では、習熟度別編成の上位クラス(E1)で学んだ学生は「上位クラス」、下位クラス(E2)だった学生は「下位クラス」を選んでいる割合が多い。これに対し、通常クラスの学生は、「上位クラス」「下位クラス」をほぼ半々の割合で選んでいる。さらに、[C]-(4)では、習熟度別クラス編成に「大賛成」「賛成」と答えた学生の割合が、実験クラスがやや多く、「反対」「大反対」と答えた学生は、通常クラスのほうがやや多い結果となっている。

[B]-(4)および[C]-(4)については、「それはなぜですか?」と、回答の理由を自由に記述してもらった。[B]-(4)の授業に関する総合評価で「とても良かった」と答えた学生(3名)は、いずれも担当教師が良かったことを理由にあげている。「良かった」と答えた54名では、会話練習、プレゼンテーション、スピーチ、リスニングなど、高校までとは違った授業体験を理由にあげる学生が最も多く(27名)、楽しかったからと答えた学生がそれに次いで多い(11名)。「どちらでもない」(18名)、「良くなかった」(6名)では、英語が嫌い、学習態度が悪い、授業以外では勉強しなかった、などと自分自身が原因とする回答が目立っている。

[C]-(4)で習熟度別クラス編成に「大賛成」「賛成」と回答した41名の記述を拾うと、レベルに応じた授業が可能であるとする回答(21名)や、効率の良さを指摘する回答(15名)が多い。「どちらでもない」と答えた者(29名)の理由では、習熟度の差や効果を認めない者(11名)が多い。「反対」「大反対」という12名では、英語力で区別することへの反発、差が広が

ることに対する懸念、やる気や刺激の減少などといった理由が見られる。

(3) 個別インタビュー

CASEC の事前・事後の2回のテスト結果で、得点が大幅に上がった学生と下がった学生を実験クラスより8人（[表2]の整理番号 #1～4 および #38～41 の学生）と通常クラスより8人（同じく整理番号 #1～4 および #34～37 の学生）を選び出した。インタビューを後期の定期試験期間中に実施したため、実際にインタビューに応じてくれた学生は6名にとどまった。この6名のうち、CASEC のテストが4月よりも上がった学生は4名（実験クラスの #2、#3、#4 および通常クラスの #3 の学生）、下がった学生は2名（実験クラスの #40 および通常クラスの #36 の学生）であった。

インタビューは、宮田研究室にて一人当たり20～30分程度行った。質問の内容は、人によって若干の違いはあるが、以下の項目については必ず質問することを心がけた。

- ア 1月に行ったCASECのテスト結果が、昨年4月よりも上がった／下がった理由は何だと思いますか。
- イ 「コミュニケーション英語」の授業を受けてどんな印象を持ちましたか。
- ウ 日本人教員が担当した「総合英語」の授業はどうでしたか。
- エ 習熟度別クラス編成についてどう思いますか。
- オ （実験クラスだった学生に対して）習熟度別にクラス分けされて、どう思いましたか。

個々のインタビュー結果は省略するが、成績が上がった学生に共通しているのは、授業以外に自分で英語の勉強をしていることであった。例えば、通常クラスのA先生のもとで勉強した整理番号 #3 の学生（得点：571 → 658）は、大学に入った4月から6月にかけてNHKのラジオ講座を聞いてみたがなかなか効果が出なかったので、7月からは市販の音声教材に切り替えて勉強すると効果が現れたと言う。それ以外にも、iPodで英語の番組（English Second Express）を聞いたり、受験勉強の時に使っていた本（熟語の問題集）で勉強したそうである。逆に、下がった学生は、授業の予習や復習もせず、ただ授業に出ただけという印象が強かった。例えば、習熟度別の下位クラスで勉強した整理番号 #40 の学生（得点：565 → 487）は、「コミュニケーション英語」の授業自体は楽しかったが、アルバイトに忙しくて勉強せず、単語や文法も忘れてしまったと言う。CASEC が下がったのはショックだったので、短期留学して挽回したいと語っていた。

5 結果の分析と考察

習熟度別クラス編成は効果があるかどうかについては、今回の試行結果を見る限り、「どちらとも言えない」と評価するのが妥当であろう。「効果があるはず」とする立場からは期待通りの結果が得られなかったことになるが、それには、以下のように様々な理由が考えられる。

1) CASEC の信頼性

英語学習の効果を測る尺度として CASEC のテストを採用したが、はたして「コミュニケーション英語」という会話の授業の効果を測るのに適していたかどうかは、わからない。B 先生は、次のように指摘している。

- ・実験クラスの整理番号 #40 の学生が、後期に行った 40 点満点の面接で 38 点という高得点であったにもかかわらず、CASEC では 78 点下がってクラスの最下位であったのには驚いている。逆に、整理番号 #6 の学生は、いつも教室の一番後ろに静かに座り、最低限の勉強しかしていないと思われたのに、CASEC で 50 点上昇したのは意外であった。
- ・CASEC のテストではリスニング分野はあるが、スピーキング分野がない。その結果、英語による面接結果と、CASEC の結果とが一致しないという現象につながったと思われる。ただし、面接では、スピーキング能力が高い学生と低い学生を峻別できても、その間にいる比較的大勢の学生をきめ細かく評価するのは困難を伴う。この問題を解決しないと、「コミュニケーション英語」で習熟度別指導の効果を上げることは難しいであろう。

2) 欠席者の扱い

CASEC のテストを 2 回とも受験したのは、実験クラス 47 名のうち 41 名、通常クラス 47 名のうち 37 名であった。実験クラスの欠席者は上位クラス 3 名、下位クラス 3 名であったのに対し、通常クラスの欠席者は（実験クラスと同じ方法で上下に分けた場合）上位 2 名、下位 8 名であった。通常クラスの 1 月の全体平均点が 4 月よりも上昇し、実験クラスを上回ったのは、このことが原因であったかも知れない。

3) 授業時間との関係

「コミュニケーション英語」の授業は週 1 回、年間で 30 回に満たない。この授業を習熟度別クラス編成で行うことが、即、英語力の向上につながるとは限らない。上記「個別インタビュー」でも述べたように、CASEC の成績が上がった学生に自己分析してもらったところ、大学での授業以外に自分なりに工夫して英語の勉強をしていることを理由にあげている。

4) 学生たちの学習態度

「コミュニケーション英語」は会話の授業である。会話という能動的な活動には、それに参加する学習者の態度やモチベーションなどといった心的側面がとりわけ重要な役割を果たす。これに関連して、授業を担当した外国人教師から、以下のような指摘があった。

- ・実験クラスでCASECの成績が良かった学生（整理番号 #9、#23）は遅刻の常習犯だったことからわかるように、英語ができるからといって学習態度が良いとは限らない。どんな内容の授業を行っても、学生たちのモチベーションが最大の鍵である。[A 先生]
- ・モチベーションに関しては、実験クラスと通常クラスの間の差はほとんどなかったと思われる。しかし、通常クラスには、整理番号 #11、#19、#42 など熱心な男子学生が、きわめて自主的に学習していた。[B 先生]

5) クラスの雰囲気

授業は、教師と数十人の学習者からなる集団の中で進行する。この集団を構成する人間とその他の様々な要因が複雑に絡み合って、独特の雰囲気を生み出す。授業が何時間目にあるか、どのように着席するかなど、物理的な側面も影響する。英語力の高い集団だからといって、活発な授業が展開されるとは限らない。担当の先生たちは、以下のような観察をしている。

- ・通常クラスには整理番号 #12 や #17 の学生などのムードメーカーがいて、後期の授業で行ったプレゼンテーションに取り組む際の雰囲気作りに貢献した。実験クラスでは、残念ながら学習に無関心な学生が数人いたために、クラス全体の士気を下げることになった。[A 先生]
- ・1年間を通じて通常クラスよりも実験クラスのほうが学生たちとのコミュニケーションがうまく運んだ。[B 先生]
- ・実験クラスの女子学生は、概して通常クラスの女子よりも親近感をもって接してくれた。後期のある時期から座席を自由にしたが、通常クラスでは授業に対する集中力が落ちる傾向が観察された。[B 先生]
- ・実験クラスの授業は前期が2時限であったのが、後期には1時限になった。遅刻してくる学生がクラスメートの学習意欲を損ねたと考えられる。[A 先生]
- ・実験クラスは前期に2時限の授業であったため、欠席が延べ10名、遅刻が延べ2名であったが、後期に1時限になると、欠席54名、遅刻32名となってしまった。その結果、3名の学生が欠課オーバーで失格となった。[B 先生]

6) 授業内容

今回の実践にあたっては、実験クラスと通常クラスの授業内容に違いが生じないように配慮した。両クラスの違いを「習熟度別クラスが上位群／下位群に分けられていること」だけにし、その他の要因をできるだけ同一に保つためであった。授業担当者は、実験クラスであることを必要以上に意識しないで授業にあたった。上位群／下位群それぞれを意識した教材や学習活動を行えば、それに見合っただけの結果（＝効果）が得られたかも知れないが、今回はあえてそうした人為的な違いが生じないように心がけてもらった。A先生は次のようなコメントを寄せている。

・「コミュニケーション英語」の授業がもしも TOEIC のような学習内容であったなら、授業の成果が CASEC の成績に反映したかも知れないが、実際の授業はその種の授業ではなかった。

6 まとめ：教養英語の効果を上げるために

以上のように、2007 年度は経済学部 1 年の 1 クラスの「コミュニケーション英語」について、習熟度別クラス編成による授業を試行した。この授業の成果を測るために、通常クラスで授業を行った 1 クラスを比較の対象として、CASEC による英語力判定テスト、授業アンケートによる意識調査、さらには抽出学生についての分析とインタビューを実施した。その結果、習熟度別クラス編成による効果を積極的に評価できる資料は得られなかった。

このような経過と結果を踏まえて、2008 年度は、「コミュニケーション英語」における習熟度別クラス編成による授業を経済学部 1 年の 5 クラスすべてにおいて実施することとし、以下のような方針で臨んでいる。

- 1) 入学試験の英語の得点に従って、上位群と下位群に分ける。
- 2) CASEC による英語力判定テストを、5 月の連休明け（事前）および後期の 1 月（事後）に実施する。
- 3) 2007 年度は上位群／下位群であることを意識した授業をあえて避けたが、2008 年度は、それぞれの習熟度に応じた内容や活動を工夫して授業を行う。

習熟度別クラス編成は、他大学にならって名古屋市立大学でも導入すべきであるという外部評価委員からの指摘に基づいて始まったという経過がある。官田の個人的見解ではあるが、名古屋市立大学の学生たちはすでに入学試験というフィルターを通過しており、英語の学力面で問題となるほど大きな差が存在しているとは思われない。とりわけ、難関と評判の高い医学部や薬学部では、新入生たちはすでに相当の英語力を備えている。また、人文社会学部の国際文化学科では英語学習に対するモチベーションが高く、充実した授業を行っている。通常クラスによる授業ではあるが、毎年実施している TOEIC の模擬試験の結果を見ると、確実に成果を上げていることがわかっている。2007 年度を例にとると、『TOEIC テスト新公式問題集』によるリーディングとリスニングのテスト結果は、全 200 問中の正解数が 4 月の 105.0 から 12 月には 120.9 へと上昇した。

それに比べると経済学部の学生たちは人数も多く、「コミュニケーション英語」担当の外国人教師からは、英語力の低い学生の指導に関する苦勞話がときどき聞かれた。習熟度別クラス編成による試行をまず経済学部からスタートしたのは、そのような理由もあった。2008 年度には、上記の方針に従って経済学部すべてにおいて習熟度別クラス編成による授業を展開しているわけ

であるが、仮に効果があるという積極的な結果が得られたとしても、それが即、全学部に習熟度別クラス編成による授業を展開すべきという結論にはならないのではないかと考えている。

名古屋市立大学では、2008年度より、外国人教師を5名から7名に増員して、教養英語のカリキュラム改革を実施に移すとともに、英検、TOEIC、TOEFLなどの資格試験の得点による単位認定制度を導入した。カリキュラム改革では、「総合英語」の授業において、すべてのクラスを2分割した少人数教育が行えるようにすると同時に、ライティング分野の「総合英語2」を外国人教師が担当できるように時間割を工夫している。2009年度には、文系学部の2年生が履修することになっている「応用英語」にて、多種多様の授業内容を提供して学生たちのニーズに応じた英語学習を可能にしたり、夏休みと春休みを利用した集中講座形式の“Intensive Course”を開設する計画がある。

こうした改革はもちろんのこと、英語の授業運営の仕方についての現職教育（faculty development）などを通じて、英語教師の力量を高めるような機会を設けることによって、名古屋市立大学における英語教育の効果を上げるような工夫をするのが現実的な方策であろう。

[資料1] 前期の授業内容

クラス	E1 & H2 / テキストなし		E2 & H1 / テキスト “English Firsthand 1”	
Week	Lesson	Details	Lesson	Details
1	Introduction	General outline of course ; Mingle activity	Meeting new people	Greeting people, introducing yourself, asking for and giving personal questions
2	Having a rant	Talking about annoying and anti-social behavior	Describing people	Describing people's appearance and personality
3	Tag-question interrogation	Revising how to ask and answer tag questions	Family relationships	Family tree; Talking about one's family
4	Teachers I have known	Describing good and bad teachers you have known	Talking about daily activities	Watch Mr. Bean video; Talking about routines and daily activities
5	Guinness Book	Expressing degrees of uncertainty; Superlative adjectives	Asking about schedules	Talking about schedules; Time, Frequency adverbs
6	What do you do?	Asking and answering questions about work	Describing locations	Describing locations, rooms and objects; Asking about rooms and things at home
7	Japan and the UK	Interpreting statistics; Expressions of conjecture	Design a mystery tour	Work in groups of three to design a mystery tour of Yamanohata campus
8	I lost baby in crush	Reading a newspaper article in groups; Role playing	Mystery tour	Students follow the directions written by other students to complete a series of tours
9	Now and then	Talking about changes in oneself, family members and Japan	Giving directions-1	Asking for and giving directions; Places in a city, store names, services
10	Authentic listening	Smoking Any Questions Radio 4	Giving directions-2	Complete a communication gap exercise focusing on giving directions
11	Interviews-1	Oral test on what was covered in the course	Test preparation	Students prepare for 5-minute conversation test
12	Interviews-2		Conversation test	

〔資料2〕 授業アンケート：「コミュニケーション英語」の授業について

2008.1.8

名古屋市大における英語教育の効果を上げる目的で、本年度初めて「コミュニケーション英語」のクラスで英語力判定テスト（CASEC）を実施し、その結果を参考にした習熟度別クラス編成による授業を試行しました。今後の参考にしたいので、つぎのアンケートに答えてください。

なお、Eクラスでは上位/下位の習熟度別クラス編成を行いました。Hクラスは番号順による通常のクラス編成で授業を実施しました。

〔A〕 あなた自身について（記号を○で囲んでください）

- (1) 所属クラス： ア Eクラス イ Hクラス
(2) 担当の先生： ア A先生 イ B先生
(3) 英語は好きですか、嫌いですか：
ア 大好き イ 好きなほう ウ 好きでも嫌いでもない エ 嫌いなほう オ 大嫌い
(4) 「コミュニケーション英語」の授業は：
ア 大好きだった イ 好きなほうだった ウ 好きでも嫌いでもなかった
エ 嫌いなほうだった オ 大嫌いだった
(5) この1年で英語を話す力がアップしたと思いますか：
ア かなりアップした イ 少しアップした ウ 変わらない
エ 少しダウンした オ かなりダウンした

〔B〕 「コミュニケーション英語」の授業について

- (1) 授業の内容は：
ア とても充実していた イ 充実していた ウ どちらでもない
エ あまり充実していなかった オ 充実していなかった
(2) 授業のスピードは：
ア 遅く感じた イ 適当だった ウ 速く感じた
(3) 学習活動に：
ア かなり積極的に参加した イ 積極的に参加したほう ウ ふつう
エ あまり積極的でなかった オ 消極的だった
(4) 全体として：
ア とても良かった イ 良かった ウ どちらでもない エ 良くなかった オ 悪かった
※それはなぜですか？

〔C〕 習熟度別クラス編成について

- (1) クラス編成を行う場合、どんな方法がよいと思いますか：（1つ以上選んでも構いません）
ア CASECなどテストの結果で イ 英語の面接結果で ウ 学生の希望で
エ その他
(2) 自分で習熟度別のクラスを選べるとしたら、どちらのクラスがいいですか：
ア 上位クラス イ 下位クラス
(3) 後期にクラス編成をやり直すことに：
ア 賛成 イ どちらでもよい ウ 反対
(4) そもそも「コミュニケーション英語」の授業を習熟度別クラスで行うことに：
ア 大賛成 イ 賛成 ウ どちらでもない エ 反対 オ 大反対
※それはなぜですか？

ご協力ありがとうございました

〔資料3〕「コミュニケーション英語」授業アンケート結果

所 属	実験クラス		通常クラス	
	E1	E2	H2	H1
〔A〕 (3) 英語は好きですか、嫌いですか：				
ア 大好き	2	0	2	1
イ 好きなほう	16	5	6	10
ウ 好きでも嫌いでもない	5	8	5	3
エ 嫌いなほう	0	6	6	4
オ 大嫌い	0	1	1	1
(4) 「コミュニケーション英語」の授業は：				
ア 大好きだった	1	0	1	2
イ 好きなほうだった	9	11	7	11
ウ 好きでも嫌いでもなかった	10	7	6	4
エ 嫌いなほうだった	3	1	6	1
オ 大嫌いだった	0	1	0	1
(5) この1年で英語を話す力がアップしたと思いますか：				
ア かなりアップした	0	0	0	1
イ 少しアップした	5	3	4	4
ウ 変わらない	8	13	13	8
エ 少しダウンした	6	2	1	5
オ かなりダウンした	4	1	2	1
〔B〕 (1) 授業の内容は：				
ア とても充実していた	1	1	1	4
イ 充実していた	14	9	10	11
ウ どちらでもない	7	10	9	4
エ あまり充実していなかった	1	0	0	0
オ 充実していなかった	0	0	0	0
(2) 授業のスピードは：				
ア 遅く感じた	0	1	0	1
イ 適当だった	22	19	19	18
ウ 速く感じた	1	0	1	0
(3) 学習活動に：				
ア かなり積極的に参加した	0	2	1	2
イ 積極的に参加したほう	9	7	4	8
ウ ふつう	8	8	10	8
エ あまり積極的でなかった	5	2	4	1
オ 消極的だった	1	1	1	0
(4) 全体として：				
ア とても良かった	0	1	0	2
イ 良かった	16	11	14	13
ウ どちらでもない	3	6	6	3
エ 良くなかった	3	2	0	1
オ 悪かった	0	0	0	0
〔C〕 (1) クラス編成を行う場合、どんな方法がよいと思いますか：(1つ以上選んでも構いません)				
ア CASEC などテストの結果で	18	14	9	4
イ 英語の面接結果で	8	3	5	3
ウ 学生の希望で	6	4	8	14
エ その他	0	1	1	0
(2) 自分で習熟度別のクラスを選べるとしたら、どちらのクラスがいいですか：				
ア 上位クラス	17	6	9	10
イ 下位クラス	4	14	11	9
(3) 後期にクラス編成をやり直すことに：				
ア 賛成	8	1	6	2
イ どちらでもない	13	16	13	14
ウ 反対	2	3	1	3
(4) そもそも「コミュニケーション英語」の授業を習熟度別クラスで行うことに：				
ア 大賛成	1	1	1	2
イ 賛成	13	8	10	5
ウ どちらでもない	8	10	4	7
エ 反対	1	1	5	4
オ 大反対	0	0	0	1